美浜町佐柿の家屋形態と表構えについて

吉　田　純　一*

The Form and the Front Style of the Houses in Sagaki District, Mihama Town

Jun-ichi Yoshida

This paper is the report of the investigation of the houses in Sagaki district, Mihama town, Fukui prefecture. I make clear the main points as following. The houses of Sagaki generally have been the roof style which is called Kirizumazukuri since the late Edo period. Another roof style called Irimoyazukuri appeared after 1955 (the thirties of Showa era). The front style was became deluxe adding the gable on the front roof and the protruded door after 1965 (the forties of Showa era).

1．はじめに

美浜町佐柿地区は、敦賀から国道27号線を小浜に向かい、椿トンネルを抜けたすぐの左手にある。地区内を通り抜ける道は旧丹後街道で、北端では国道で分断されながらもさらに北方の観音山麓に向かって延び、南方は国道に沿うように南進しながら河原市地区へと続いている。道幅は対向車がようやくすれ違える程度の狭さで、地区内だけで矩折れの曲がりが３ヶ所もみられる。通り沿いにはところどころに空き地があるが、現在も54棟余の木造二階家が建ち並び、中には厨子二階の軒が低い古風な表構えの家屋もみられる。

佐柿の集落は、天正11年（1583）に豊臣秀吉の家臣木村定光によって整備され、以来、丹後街道沿いの街村として発展し、江戸時代を通して90戸から100戸前後の家屋が軒を連ねていた。こうした佐柿の成立や江戸時代から明治期に至る家屋や家並み、それらの変容についてはすでに報告済みである[1)]。

本稿は、平成14年８月に吉田研究室が実施した家屋調査によって得られた成果に基づきながら佐柿地区の家屋形態や表構えとその特徴について報告する。

2．対象家屋の建築時期

今回の調査で、実測調査あるいは聞き取り調査をした家屋は、旧丹後街道沿いにある家屋を中心として地区内に所在している75棟である[2)]。これらは表１に示した。まず、各家屋の建築年代についてみることにしたい。

1）江戸時代に遡る家屋

江戸時代につくられたとみられるのは、小畑実家住宅（L17）[3)]と武田貢家住宅（L38）である。

＊建築学専攻

小畑実家住宅は、屋根の鬼瓦に弘化３年（1846）の銘があり[4]、表構えが少し改変されているが、形式的にみても江戸時代に遡るとみてよい。当家は佐柿のほぼ中央、街道が鍵型に折れるＴ字路の北西の角地にたっていて、佐柿の家並み景観的にも重要な位置を占めている。小畑家は明治９年（1876）の地籍図でも同じ位置に敷地を構え（小畑三郎兵エ）、敷地の広さは375坪で、地区内では２番目に広い屋敷である[5]。江戸時代に遡る町家の遺構は、福井県内でも少なく、当家は佐柿地区のみならず、県内でも貴重な町家の現存例である。

一方、武田家住宅は、地区の南端に位置している。白漆喰大壁の家で、対象家屋の中では特異な表構えをもっている。当家屋は前方の土蔵（２間半×４間）に居住部・座敷を継ぎ足して一体的に屋根を掛けて一家屋としている。これが特異な表構えを生み出しているのである。当家の先祖は武士で、幕末に京から当地へ移り、今の家屋は天保２年（1831）につくられたと伝わっている[6]。これを裏付ける資料は見当たらないが、そうなれば、佐柿で最も古い家屋になるが、後方の座敷の様式からみると、江戸末期から明治初につくられたとみることもできる。

２）明治期の家屋

明治期の家屋とみられるのは、高木賢二家住宅（R3）と瀬戸周一家住宅（L6）である。これらも建築年代を示す根拠はないが、高木家住宅は明治28年（1895）との言い伝えがあり、瀬戸家住宅は高木家より１、２年遅れてつくられたという。両家はともに間口４間半で、二階は階高が低く、２列３室構成の平面形式も似通っている。建築形式からみてもほぼ同じ頃につくられたという言い伝えはうなずける。高木家住宅は地区の北端すなわち敦賀方面からの入り口にあり、瀬戸家住宅はそれから数軒入った位置にある。

この他、地区の南寄りにある宇都宮茂雄家住宅（L33）やその左手前方の小畑佐吉家住宅（R34）、山地治家住宅（L31a,b）、上村康弘家旧住宅（R35）なども厨子二階の低い軒を持つ家屋で、これらも明治期まで遡る可能性が高く、遅くても大正期の家屋と考えられる。

３）大正～終戦前後の家屋

大正期の家屋は、新田卜幸家住宅（L44）である。当家は大正11年（1922）につくられたと伝わる。明治期の例と比べると、二階の階高がいくらか高めである。この他、大同康之家住宅（L20）は昭和10年頃（1935）の建築、そして金森秀樹家住宅（L12）は終戦間近の昭和19年（1944）、米田秀一家住宅（R49）は終戦直後の昭和21年と伝わっている。このうち、米田家住宅は厨子二階で、明治期の例に近く、古家を移築した可能性もあるが、残りの３棟は、二階の階高が大きく、明治期の例と比べると、新しさがうかがえる。

４）終戦後から最近の家屋

江戸時代から昭和20年の終戦前後までにつくられたとみられる家屋は、上記の12棟くらいで、残りの大半は戦後、それも昭和30年代以降につくられている。ちなみに、建築年代が伝わっているものをみると、昭和30年代が７棟、同40年代が14棟、同50年代が10棟、同60年代が６棟で、平成のものも９棟を数える。佐柿地区では昭和40年代から50年代にかけて多くの家屋が建て替えられたことがわかる。

３．家屋形態

次に、家屋の形態について検討するが、それに先立って佐柿の家屋の間口規模について触れておきたい。

１）間口規模

後述するように、ほとんどの家屋は表側に下屋をつけ、主屋の間口幅より横に長く延びている例が多い。そのために下屋では正確に家屋の規模を表すことができない。したがって、ここでは主屋二階の正面柱間数に注目し、これを間口規模として比較検討する[7)]。

間口規模の最大は小畑家住宅（L17）の８間半ある。これに次ぐのが宇都宮茂雄家住宅（L33）の６間半で、５間半も１例みられる。逆に最小は南昭二家住宅（R42）などの２間で３例、２間半も１例みられる。これら以外はすべて３間から４間半の中におさまっている。内訳は、４間半が19例、４間が18例、３間が16例で拮抗し、３間半の例も９例ある。

したがって、江戸時代の小畑家住宅（L17）と武田家住宅（L38）は大規模であるが、これを除けば、明治以降、現代に至るまで、間口規模にさほど時代的な相違は認められない。佐柿においては間口４間と４間半および３間の家屋が一般的、かつ標準的であることが指摘できる。

２）家屋形態の類別

続いて、正面の形態についてみることにする。家屋の正面の形態を特徴づける要素として、屋根の形式と入り口のつき方および下屋の形状を取り上げてみたい。

2－1）屋根形式

旧丹後街道沿いに屋敷を構える54棟についてみると、屋根の形式は切妻造（A）と入母屋造（B）がみられるが、前者が50例、後者が４例で、切妻造が圧倒的に多い。この傾向は旧街道に面していない家屋でも同様である。切妻造は上述した江戸期に遡る家屋をはじめ、平成になってつくられた家屋にもみられる。これに対して、入母屋造の家屋は昭和30年の小畑弘家住宅（R46）が最も早い例である。つまり、佐柿においては、江戸時代以来、今日まで切妻造が主流であり、入母屋造は昭和30年以降にみられるようになったことがわかる。なお、旧街道から離れた岩村家住宅（R54）は佐柿地区にみられる唯一の寄棟造の例である。

2－2）入り口のつき方

旧街道に面する家屋の多くは、屋根形式を問わず、通りに面する側に入り口（玄関）をとっている。切妻造でも入母屋造でも棟を通りに平行させていれば、平側に入り口があるから平入り(a)、棟を通りに直交させれば、妻側に入り口がつくから妻入り(b)になる。

旧街道沿いの54棟のうち、切妻造の50例の多くは、通りと平行に棟を配し、通りに平側をみせている。例外は山本康雄家住宅（L5）、上村康弘家の新宅・旧宅（R35・36）など数例だけである。しかもこれらのほとんどは通りから奥まった位置に家屋を構えている。

一方、入母屋造家屋で旧街道に面している４例のうち、３例は妻入りである。しかもすべて棟を通りに直交させ、破風を通り側にみせている。入母屋造は切妻造よりも形態は複雑で、より豪華にみえる。妻面を正面にみせるのもこうした意識の表れと思われる。

表2　調査家屋一覧(1)

	番号	家屋名	建築年代	階数	間口(間)	屋根形状	屋根葺材/飾り	入り口	下屋形状		軒形式		袖壁	壁		壁材		格子	下屋取込	備考
									形式	破風・玄関	主屋	下屋		1階	2階	1階	2階			
旧丹後街道沿い北側の家屋	L5	山本 康雄		2	3	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	大壁	大壁	その他C	その他C	×	○	奥まってあり
	L6	瀬戸 周一	明治29	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	○	真壁	真壁	板張り/白漆喰	白漆喰	×	○	けらば塗り込め(赤土)
	L7	関口 博治	昭和46	2	3.5	切妻造	瓦/立浪	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り／白漆喰	×	○	
	L8	武長 草朗	昭和54頃	2	3.5	切妻造	瓦/宝珠	平入り	別棟	破風・玄関	垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	奥まってあり、壁下黒
	L9	小池 市郎	昭和36	2	3.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	下屋改装(奥行き1間)
	L10	田辺 泰		2	3	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り／白漆喰	×	○	下屋改装、2段に、壁下灰色
	L11	瀬戸 健美	昭和32頃	2	4.5	切妻造	瓦/立浪	平入り	別棟		垂木	腕木(斜)	×	真壁	真壁	下見板/黒漆喰	下見板/白漆喰	×	○	壁下黒・壁下白
	L12	金森 秀樹	昭和19	2	4	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	
	L13	高木 操	昭和41	2	4	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	壁下灰色
	L14	瀬戸 正人	昭和55	2	4	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	腕木(斜)	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	壁下黒
	L15	兼田 健勇	昭和37	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	腕木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	×	壁下灰色
	L17	小畑 実	弘化3(1846)	2	8.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		登梁	垂木	○	真壁	真壁	下見板/黒漆喰	白漆喰	○(平)	○	
	L18	重兼 光良	昭和52.	2	3.5	切妻造	瓦/宝珠	平入り	別棟	玄関	垂木	腕木(斜)	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下灰色
	L19	武長 宗樹	平成5	2		切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	
	L20	大同 康之	昭和10頃	2	4	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	×	大壁	大壁	板張り	板張り	×	○	現在は平入り
	L21	武長 成志郎	平成4	2	4	切妻造	瓦/宝珠	平入り	別棟	破風	垂木	腕木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	L22	兼松 啓二	昭和52.	2	3.5	切妻造	瓦/宝珠	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	L23	岡本 丈夫	昭和62	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/その他	×	○	
	L24	水永 秀夫	昭和32	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	瓦(オレンジ色)
	L27	知場	昭和37	2	3	入母屋造	瓦/立浪	妻入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	奥まってあり
	L30	田辺 浩	昭和63	2	4.5	切妻造	瓦/宝珠	平入り	寄棟	破風・玄関	垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	L31a	山地 治(東)	明治～大正	2	3	切妻造	瓦	平入り	片流れ		腕木	垂木	○	真壁	真壁	板張り	白漆喰	×	○	L31bと一屋、壁下白
	L31b	山地 治(西)	明治～大正	2	4	切妻造	瓦/立浪	平入り	片流れ		登梁	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	白漆喰	×	○	L31aと一屋
	L32	木野 幸	昭和47	2	4	切妻造	瓦/宝珠	平入り	片流れ	玄関	垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	白漆喰	×	○	奥まってあり、壁下灰色
	L33	宇都宮 茂雄	明治～大正	2	6.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		腕木	垂木	○	真壁	真壁	下見板	白漆喰	○(平)	○	下屋に幕掛け板・壁下灰色
	L36	山本 清太郎	昭和51	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	L38	武田 貢	天保2	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		腕木	垂木	×	真壁	大壁	下見板/白漆喰	白漆喰	○(平)	○	軒塗り込め
	L39	武長 忠則		2	4	入母屋造	瓦/宝珠	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	壁下黒
	L42	小池 博	昭和37～47	2	3	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	金属板/白漆喰	金属板/白漆喰	×	○	
	L43	国渓 幸猛	昭和62	2	3.5	入母屋造	瓦/宝珠	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	壁下黒
	L44	新田 卜幸	大正11	2	3	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	金属板/白漆喰	金属板張り	×	○	
	L46	瀬戸 慎一	昭和41	2	3	切妻造	瓦	平入り			垂木	垂木	×	大壁	大壁	金属板張り	金属板張り	×	×	壁下黒

表2 調査家屋(2)

	番号	家屋名	建築年代	階数	間口(間)	屋根形式	屋根葺材/飾り	入り口	下屋形状 正面(長間)	下屋形状	軒形式 主屋	軒形式 下屋	袖壁	壁 1階	壁 2階	壁材 1階	壁材 2階	格子	下屋取込	備考
旧丹後街道沿い南側の家屋	R2	高木賢二(新宅)	平成2	1	4	切妻造	瓦	平入り	別棟	玄関	垂木	×	×	真壁	×	板張り/白漆喰	×	×	×	奥まってあり
	R3	高木賢二(旧宅)	明治28	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	○	真壁	真壁	板張り(全)	土壁	×	○	
	R4	松田 隆治	平成4	2	3	切妻造	瓦	妻入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	金属板/その他	金属板/その他	×	○	
	R6	八木 光男	昭和58	2	3	切妻造	瓦	妻入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	板張り/その他	板張り/その他	×	○	奥まってあり
	R7	大塩 浩	昭和33	2	3	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	金属板/その他	金属板張り	×	○	奥まってあり、前にブロック塀
	R8	八木 秀之	昭和45	2	4	切妻造	瓦	妻入り	別棟		?	?	×	真壁	大壁	板張り/その他	金属板/その他	×	×	軒に板が張ってある
	R9	田中 ヨシ子	平成元年	2	3	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	×	真壁	真壁	白漆喰	下見板/白漆喰	×	○	壁下黒
	R12	宮下 直		2	4	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	×	真壁	大壁	金属板張り	金属板張り	×	○	やや奥まってあり
	R13	藤田 良明	昭和48	2	3	入母屋	瓦/宝珠	妻入り	片流れ		垂木	垂木	×	真壁	大壁	その他	板張り/その他	×	○	
	R15	岩本 勝	昭和61	2	4	切妻造	瓦/宝珠	平入り	寄棟	破風	垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R16	五井 清次	昭和42	2	4	切妻造	瓦	平入り	寄棟	破風	垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R17	野瀬 隆	平成5	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	その他/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R19	武長 二三夫	昭和49	2	4	切妻造	瓦/宝珠	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R20	堂嶋 隆	昭和48	2	4.5	半切半入	瓦/宝珠	平入り	別棟		垂木	腕木(斜)	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R22	草兼 廣司	昭和58	2	4.5	切妻造	瓦/宝珠	平入り	別棟	破風	垂木	垂木	×	真壁	真壁	その他/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R24	兼松 義勝	昭和55	2	3.5	入母屋造	瓦/宝珠	妻入り	寄棟	破風	垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下灰色
	R26	福田 敏朗		2	3	切妻造	瓦/宝珠	平入り	片流れ	破風	垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	奥まってあり、壁下灰色
	R27	山下 正	昭和43	2	4	切妻造	瓦/宝珠	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	金属板/その他	金属板/その他	×	○	やや奥まってあり、前に植え込み
	R28	田辺 修一郎	昭和55	2		切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R30	加藤 茂兵太		2	2.5	切妻造	瓦/宝珠	平入り	別棟	破風	垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	主屋屋3棟つながる、壁下黒
	R31	立神 真太郎	平成2	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	寄棟	破風	垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R32	南 正明	平成10	2	4.5	切妻造	瓦/宝珠	平入り	別棟	玄関	垂木	垂木	×	真壁	大壁	板張り/その他	その他	×	○	
	R33	伴 和男	平成2	2	3.5	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	下見板/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R34	小畑 佐吉	明治～大正	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	垂木	×	真壁	大壁	金属板/板張り	金属板張り	×	○	
	R35	上村 康弘(旧宅)	明治～大正	2	5.5	切妻造	瓦	平入り	片流れ		垂木	腕木(斜)	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	白漆喰	×	○	奥まってあり、妻を通り側にみせる
	R36	上村 康弘(新宅)	昭和60	2	4	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下灰色
	R37	山本 次男	昭和48	2	4.5	入母屋造	瓦/宝珠	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R39	関口 幸男		2	4	切妻造	瓦/宝珠	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R41	藤井 和子	昭和43	2	4.5	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	
	R42	南 昭二	昭和40頃	2	2	切妻造	瓦	妻入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	金属板/白漆喰	金属板/白漆喰	×	○	壁下黒
	R43	木子 隆史		2	4.5	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	金属板張り	金属板/土壁	×	○	
	R46	小畑 弘	昭和30	2	3	入母屋造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	
	R47	上村 登志男		2	2	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	
	R48	山田 義雄	昭和42	1	2	切妻造	瓦	平入り			垂木	垂木	×	真壁	大壁	板張り	板張り	×	○	
	R49	米田 秀一	昭和21	2	3	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	下見板/板張り	板張り	×	○	
	R50	中村 武	昭和53	2	3	入母屋造	瓦/宝珠	妻入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	板張り/白漆喰	板張り/白漆喰	×	○	壁下黒
	R51	宇都宮 繁	昭和47	2	3.5	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	金属板/白漆喰	金属板/白漆喰	×	○	
	R53	斉藤 昭	昭和35	2	4	切妻造	瓦	妻入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	金属板/その他	金属板張り	×	○	壁下黒
	R54	岩村 辰之助		1	5.5	寄棟造	瓦	平入り			垂木	×	×	真壁	大壁	下見板/白漆喰	×	×	×	
	R55	八木 政志		2	2	切妻造	瓦	妻入り	別棟		?	?	×	真壁	大壁	その他C	その他	×	○	軒に板が張ってある
	R57	宇都宮 肇		2	4.5	切妻造	瓦	平入り	寄棟		垂木	垂木	×	真壁	真壁	その他C	下見板/白漆喰	×	○	壁下黒
	R58	高木 郷治	昭和43	2	2.5	切妻造	瓦	平入り	別棟		垂木	垂木	×	真壁	大壁	板張り	金属板/その他	×	○	
	R59	八木	昭和57頃	1	5	切妻造	瓦	平入り			垂木	×	×	真壁	×	金属板/その他	×	×	×	

旧街道から離れてたつ家屋についても、切妻造の場合はやはり平入りが多く、旧街道沿いの家屋と同じであるが、入母屋造の場合は４例中３例が平入りで、やや異なった傾向がみられる。

2−3）下屋の形状と家屋形態の関連

佐柿の家屋のほとんどは正面に下屋をつけている。この下屋の形状は次の３形式に大別できる。ひとつは、正面の間口規模一杯についている下屋である。本稿ではこれを①片流れと呼ぶことにする。また、正面だけでなく側面までまわる下屋で、そのために隅棟がつく形式、これを②寄棟と呼ぶことにする。さらに側面の下屋が大きく発達し、棟も高くなって主屋から突き出たようにつく下屋がある。これは台所や炊事場が主屋の側面に別棟で張り出したもので、正面には①片流れや②寄棟の下屋がついている。しかし、ここでは正面の下屋は無視し、③別棟の下屋と呼んで別に扱うことにする。

下屋の形状がわかる69棟についてみる[8]と、①片流れの下屋は19例、②寄棟の下屋は23例、③別棟の下屋は27例あり、別棟の事例がいくらか多い傾向が認められる。しかし、例数は拮抗している。また、下屋に関して注目されるのは、正面に大きな破風をつけている例、入母屋屋根の玄関を前方に張り出していることである。これらは先の入母屋造の破風を正面に向けるのと同じように、表構えを強く意識したものとみられる。

下表は屋根形式（切妻造・入母屋造）や入り口のつき方（平入り・妻入り）と下屋の形状（片流れ・寄棟・別棟）の関連を年代別に整理して示したものである。

表2　家屋形態の分類

屋根形式	切妻造家屋(A)						入母屋造家屋(B)					
入り口	平入り (a)			妻入り (b)			平入り (a)			妻入り (b)		
下屋	①片流れ	②寄棟	③別棟	①片流れ	②寄棟	③別棟	①片流れ	②寄棟	③別棟	①片流れ	②寄棟	③別棟
江戸時代	●●											
明治～大正	●●●● ●●●	●										
戦前(昭和20まで)	●	●										
昭和20年代		●										
昭和30年代	●●●		●●			●						●
昭和40年代	◎	●●●○	●●●●		●	●		●●		●		
昭和50年代			●●●● ○◎◎			●					○	●
昭和60年代		●○◎	●						●			
平成時代	●●	●●○	○◎◎		●							
年代不詳	●○	●●●	●●●○		●			●				
計	18	16	21	0	3	3	0	3	1	1	1	2
	55			6			4			4		
	61						8					

○は下屋に破風がつくもの　　◎は入母屋屋根の玄関が張り出すもの

すでに述べたように、佐柿の家屋は、切妻造（A）で、平側に入り口をとる平入り（a）の例が圧倒的に多い。この切妻造・平入り家屋に限って下屋の形状をみると、①片流れが18例、②寄棟が16例、③別棟が21例あって、例数は似通っている。しかし、①片流れは江戸時代や明治～大正期につくられた古い家屋に多くみられる。これに対して寄棟の例は、明治～大正期、戦前、昭和20

年代がそれぞれ１例づつあるものの、13例は昭和40年代以降の家屋である。また③別棟の下屋は昭和30年代が2例あるが、15例は昭和40年代以降のものである。この傾向は、例数は少ないものの、昭和30年代～40年代以降の切妻造・妻入りの家屋や入母屋造の家屋にも当てはまる。
下屋に破風がつく例（○）や入母屋屋根の玄関を張り出す例（◎）は、切妻造・平入りの家屋の②寄棟の下屋と③別棟の下屋に多くみられる。破風がつく最も古い例は、昭和42年の五井清次家住宅（R16）である。一方、入母屋屋根の玄関を張り出すのは、昭和47年の木野幸家住宅（L32）が最初である。そして、昭和50年代～平成時代の③別棟の下屋をもつ家屋は、11棟中６棟が破風もしくは入母屋の玄関がみられる。こうした破風や入母屋の玄関の普及をみても昭和40年代に表構えを意識するようになり、50年代以降その傾向がより強まっていったとみることができよう。

2－4）家屋形態の時代的変遷

以上、佐柿の家屋形態について、屋根形式と入り口のとり方、および下屋の形状からみてきたが、次のような時代的変容を指摘できるであろう。すなわち、江戸時代から昭和60年代にいたるまで、佐柿の家屋は、切妻造・平入り形式が主流である。そして昭和30年代以降になると、例数は少ないものの、切妻造・妻入り形式や入母屋造の家屋もみられるようになった。
また、正面につく下屋は、古くは前面だけにつく片流れが一般的であったが、昭和30年代以降、側面にも下屋をまわした寄棟の下屋、あるいは別棟として側面に大きく張り出す下屋が多くみられるようになった。さらに、下屋に破風をつけたり、入母屋屋根の玄関を前方に張り出した例は、昭和40年代に入ってみられるようになり、特に昭和50年代以降、この傾向は顕著になっていった。

４．表構えの形式・特徴

ここでは、佐柿の家屋の表構えについて触れてみたい。

１）屋根形式・葺材

佐柿の家屋の屋根は、切妻造、入母屋造の形式にかかわらず、現在はすべて桟瓦葺きである。小畑家住宅（L17）は前述のように、鬼瓦銘に弘化３年（1846）とあり、この時にそれまでの板葺きから瓦葺きに変えられた可能性が指摘されている[9]。当家は以前には造酒屋を営む、地区内でも有力な商家であり、やや特異な例であろう。また、調査に立ち会っていただいた古老によると、当地区には茅葺の家は少なかったというが、江戸時代から佐柿の一般的な家屋に瓦が普及していたとは考えられない。瓦葺きは大正や昭和になってからで、それ以前は板葺きの時代があったものと思われる。

また屋根装飾として「立浪」（たつなみ）と呼ばれている装飾瓦や下屋の隅棟の上に置かれている宝珠状の飾り瓦が注目される。「立浪」は特に切妻屋根の両端につく鬼瓦（鬼板）の頂部につく湾曲した形の飾り瓦で、呼称は上方に反りあがる形状が高波に似ているからつけられたと思われる。伸び栄える家の繁栄を願ったものであろう。「立浪」がみられるのは４例だけであるが、明治～大正とみられる山地家住宅（L31）もこの中に含まれている。一方、宝珠状の飾り瓦は22棟にみられ、「立浪」よりも一般的である。しかし、ほとんどが昭和40年代や50年代以降の

家屋にみられることから「立浪」よりも新しい屋根装飾といえる。

2）軒形式

越前の各地に残る伝統的な町家では、屋根の骨組みである太い登梁を外に持ち出して出桁を支えたり、側柱から水平に腕木を延ばして出桁を支える軒形式がみられる[10]。前者を登梁式、後者を腕木式と呼ぶことにするが、こうした技法によって町家特有の深い軒が造られている。佐柿でも、江戸時代に遡る小畑家住宅（L17）は登梁式、武田家住宅（L38）は腕木式の手法が採用されている。しかし、この両家以外はすべて側柱列で垂木を支える手法（垂木式）をとっている。明治期はもちろん大正や昭和初期にも登梁式や腕木式の事例が認められる越前と比べると、こうした伝統的な軒形式の消滅がやや早いように思える。

なお、下屋の軒形式も大半が垂木であるが、腕木で出桁を支える腕木式が７例みられる。これらはすべて旧街道沿いの家屋にみられ、しかも瀬戸健美家住宅（L11）など４例は、腕木を水平に持ち出さず、前方にやや傾斜させている。こうした事例は越前の大野や武生など越前の町屋ではみられず、佐柿あるいは若狭地域独特の手法と思われる。

3）二階の階高

江戸時代に遡る小畑家住宅（L17）の二階は、階高が低い厨子二階で、太い竪子が入った半間幅の格子窓が３箇所、南側より等間隔に並び、西端の１間半は細い竪子の出格子がついている。このうち、西端の出格子は明治以降に増設されたもので、半間幅の太格子窓が古い形式とみられる。また同じく江戸時代の武田家住宅（L38）は前面が白漆喰の大壁になっていて、中央寄りの２箇所の格子も塗り込められた虫籠窓になっている。これも古い開口形式とみられる。明治の例である高木家住宅（R3）や瀬戸家住宅（L6）も厨子二階で、現在はガラス戸入りの窓がついているが、これらの窓は改修されたもので、当初は開口部がなく、全面壁で閉ざされていた可能性が強い。厨子二階の場合、二階表側は屋根裏のままで、たとえ使われたとしても物置程度であり、居室がとられることはなかった。そのために開口部はなかったり、小さくてもかまわなかった。ただし、大正期やそれ以後につくられた家屋では、二階表側にも居室がとられるようになり、そのために階高が高く、開口部も大きくなっている。

4）袖壁

二階壁面の両端につく袖壁（袖卯達あるいは単に卯達と呼ぶこともある）も伝統的町家の表構えを構成する要素のひとつである。佐柿では小畑家（L17）、武田家（L38）、高木家（R2）、瀬戸家（L6）、宇都宮家（L33）・山地家（L31a,b）に袖壁がみられる。しばしば述べているように、これらはいずれも江戸時代から明治期の古い家屋であり、これ以外にはみられない。つまり、佐柿の家屋では明治ころまで袖壁がみられ、大正以降になるとつかなくなる傾向が指摘できる。ちなみに、越前の町家にみられる袖壁は、前方の方立てが下端の腕木に乗って支持されているが、佐柿あるいは若狭地方の袖壁は方立てが腕木の下方までさがり、方立てに腕木がつく形式になっている[11]。佐柿でも同様である。

5）格子

一階につく出格子や平格子も町家の表構えを特徴づける大きな要素のひとつである。佐柿において、現在、格子がみられるのは小畑家住宅（L17）と武田家住宅（L38）、宇都宮家住宅（L33）の３例だけで、それもすべて平格子である。小畑家は北端３間と南端２間に平格子がついている。これらはいずれも当初からとみてよい。しかし、これ以外の例は改修されている。格子がみられる例が少ないのは、古い家屋が少ないことに加えて、本来吹き放しであった下屋を内部に取り込むなどの改修がなされ、それに伴って格子も取り除かれていったのであろう。

6）壁面と下見板

佐柿の家屋の表構えで注目されるのは、白漆喰壁と下見板張であろう。一階壁面や二階壁面はほとんどが真壁である。現在は板張で大壁状になっているが、これらも板をはずせば真壁になるはずで、漆喰壁の本格的な大壁がみられるのは武田家住宅（L38）の二階壁面だけである。また、瀬戸周一家住宅（L6）は妻面を大壁としている唯一の例である。

各家屋の一・二階壁面をみると、上方約３分の１程度を白漆喰壁、下方３分の２を下見板張とするのが一般的である。そして中には板目や張り方を意識してデザインしている例もあり、こうした白漆喰壁と下見板の取り合わせが佐柿の表構えの特徴ともいえよう。

さらに壁面の細部に目をやると、下見板の上枠に沿って、幅５～６ｃｍ程を帯状に黒色や灰色で縁取りしている家屋が多く、34例もみられる。壁の色とは異なる色が用いられているためにすぐ目にとまるが、特に機能性は考えられず、地区の人がいうように、壁面を意識したデザインであろう。これも注目される点である。

5．結　語

以上、佐柿の家屋について、正面から見た家屋形態ならびに表構えについて検討してきた。明らかになったことや指摘できることは次のとおりである。

①佐柿は天正期に丹後街道沿いの街村として成立したが、現存している家屋70数棟の中で、建設年代が古い家屋は、江戸時代のものが２棟、明治期のものが３～４棟程度、これに大正期や戦前のものを含めても10棟余に過ぎない。そして大半は昭和30年代以降につくられた家屋である。

②二階正面の柱間数をもとに、家屋規模をみると、最大８間半～最小２間までみられるが、４間半～４間の例が圧倒的に多く、これが佐柿の家屋の標準的間口規模といえる。

③佐柿の家屋形態は、江戸末期以降、切妻造・平入り形式が一般的である。そして昭和30年代以降になると、例数は少ないが、切妻造・妻入りの家屋や入母屋造の家屋もみられるようになってきた。

④下屋については、正面だけにつく片流れ形式は江戸時代に遡る家屋以降昭和60年代の家屋まで継続してみられる。しかし、昭和30年代以降になると、側面までまわす寄棟形式や側面に台所や炊事場を張り出すために別棟形式の下屋もみられるようになる。昭和40年代～50年代以降になると、下屋に破風をつけたり、入母屋の玄関を前方に張り出したりして、表構えをよりりっ

ぱにみせようとする傾向が強く伺えるようになる。

④伝統的町家の表構えの主要な要素である、軒形式（登梁式や腕木式）は江戸期の家屋に限られ、厨子二階や袖壁、格子などは明～大正期以前の家屋に限られている。そして佐柿の家屋の表構えとして注目されるのは、屋根の両端につく「立浪」や下屋の隅棟につく宝珠状飾り瓦、さらに一・二階壁面の下見板張、そして壁面下端を別の色土で縁取りする意匠などである。

■**謝辞**：現地での調査に際しては、佐柿地区の皆さんの多大なご協力を得た。また美浜町教育委員会には調査の段取りから佐柿地区への調査依頼、アンケートの配布などをお世話いただいた。末尾ながら厚く感謝申上げたい。

（註）

1）吉田純一「丹後街道の街村・佐柿について」（『福井県歴史の道調査報告書　第2集　北陸道II・丹後街道Ⅰ』福井県教育委員会　平成14年3月刊　所収）

2）近年はやりのハウジングメーカーによってつくられた家屋や表構えが大改造している家屋など5棟は除外している。

3）括弧内の記号・番号は、調査に際して便宜的に付けたもので、旧丹後街道の北側（L）と南側（R）とし、東から西に向かって順に番号を伏している。

4）福井県史編さん室『福井県史　史料編14　建築・絵画・彫刻等』平成元年刊

5）註1掲載「丹後街道の街村・佐柿について」

6）現当主、武田貢氏のご教示による。

7）平屋の家屋は4棟あるが、これらについては1階を基準に間口規模を求めている。

8）片流れや寄棟の下屋は、主屋側柱から半間程度出る、庇状のものが古い形式で、中には近年改修され、出が1間あるいはそれ以上のものものもみられるが、これらについても現状で分類している。

9）註4掲載の『福井県史　史料編14』

10）若越建築文化研究所『越前大野の城下町と町家』（日本ナショナルトラスト　平成11年）など参照

11）この点については、註4掲載の『福井県史　史料編14』においても指摘されている。

（平成14年12月4日受理）